

## 第 42 回「南山大学英語教員セミナー」概要

開催日時： 2018 年 7 月 31 日（火）～8 月 2 日（木）、10 時～15 時

開催場所： 南山大学 R61 教室

テーマ：「英語教育をめぐる諸問題：何をどう教え、どのように評価するか」

講師： Anthony Cripps（南山大学外国語学部教授）

Fern Sakamoto（南山大学外国語学部講師）

Sean Toland（南山大学外国語学部講師）

John Shillaw（南山大学外国語学部教授）

鈴木 達也（南山大学外国語学部教授）

我が国には 150 年を超える英語教育の歴史がありますが、英語をめぐる「時代のニーズ」、  
「世界情勢」は常に変化しており、ベテランの英語教員になればなるほど、自らが英語を学ん  
だ時と比べて、様々な面でズレが生じてしまうことは避けられないことであると言えましょ  
う。

例えば、一口に「英語」を教えると言っても、イギリス英語／アメリカ英語といった違いだ  
けでなく、現代のように英語の非母語話者の英語使用者の方が英語母語話者よりも多く、さら  
に非母語話者による英語の使用が拡大し続ける時代においては、英語教育でどのような英語を  
教えるべきなのかということについても慎重に検討する必要があります。

また、ここでいう「英語」とは、単なる言語としての英語だけではなく、それを使用する人々  
の文化的な側面についても考慮する必要があることを忘れてはなりません。さらに、現在の我  
が国の英語教育においては、単に英語を学習するだけでなく、英語を使って実際にコミュニケ  
ーションができるようになることが求められており、いかに「優秀な英語のコミュニケーター」  
を育てるかについても検討する必要があります。

一方、技術革新に目を向ければ、英語教育に取り入れれば役立つであろう近年の情報通信技  
術の進歩には目を見張るものがありますが、それらの可能性を十分活かしきれていないという  
現実があることも否めません。私たち英語教育者は、どのように新しい技術と向き合ってい  
けば良いのでしょうか。

さらに、今年の英語教員セミナーでも取り上げたように、「主体的・対話的で深い学び」の実  
現を目指す「アクティブ・ラーニング」の重要性が指摘されていますが、アクティブ・ラーニ  
ングにおいて学習者の評価はどのようにしたら良いのでしょうか。教員が「評価」とは何かにつ  
いて理解を深めなければ、本当の意味での学習者の成長の測定は難しいでしょう。今年の英語  
教員セミナーでは、このような英語教育をめぐる諸問題について、参加者の皆さんとのディス  
クッションも交えて、多面的に考えてみたいと思います。

1 日目は、Anthony Cripps 講師が第一講義で「Creating Effective Learning Environments」  
と題し、生徒の自律性や動機付けにも言及しながら、いかに授業を楽しく、かつ効果的なもの  
にするかについて探ります。第二講義では、「Using Technology to Support Active Learning」

と題し、授業の中にいかに情報通信技術を織り込んでいくかとともに、技術を授業の内外で生徒を支援するのにどのように活用したら良いかについて考えます。

2 日目は、第一講義で Fern Sakamoto 講師が「Building Confidence and Communicative Competence」と題し、英語コミュニケーターの育成について考えます。英語学習者が優秀な英語コミュニケーターになるためには、不安や自信のなさといったハードルを克服していかなければなりません。どのようにしたら生徒に自信を持たせ、コミュニケーション技術を高めることができるのかについて、受講者の皆さんとディスカッションします。

2 日目の第二講義では、Sean Toland 講師が「Integrating Critical Thinking and Digital Literacy into an English Language Course」と題し、インスタグラムからフェイクニュースまで、巷に溢れるデジタル情報とどのように向き合ったら良いかという問題について、「批判的思考」の視点から考えます。批判的思考、デジタル読解力、コミュニケーションスキルといった問題を英語教育にどのように取り込んでいくべきかということについて、多くの場面で有効と考えられる実用的なアクティビティを紹介しつつ検討します。

最終日は、第一講義で John Shillaw 講師が、テストとは何か、そしてアクティブ・ラーニングにおける評価とはどのようなものであるべきかという点について考えます。表面的なパフォーマンスの評価ではなく、本当の意味での学習者の成長の測定をするにはどのような視点が必要なのか、評価の本質的な問題に光を当てます。

最終日の第二講義では、鈴木達也講師が、「日本の英語教育が教えるべき英語とは」と題し、英語非母語話者の英語使用が拡大し続ける今日、我々はどのような英語を教えるべきなのかについて、World Englishes や English as a lingua franca の視点にも言及しながら検討します。

この 3 日間のセミナーを通じて、現在の我が国の英語教育が直面する多くの課題について、アクティブ・ラーニングによる理解を深めることができれば幸いです。多くの皆様のご参加をお待ちしております。